

仙台市文化財調査報告書第31集

# 仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ

茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査略報

昭和56年3月

仙台市教育委員会  
仙 台 市 開 發 局

# 仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ

茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査略報

昭和56年3月

仙台市教育委員会  
仙台市開発局

## 序 文

最近、都市圏の拡大に伴う都市問題が表面化しつつあり、都市環境の整備、充実や住宅問題等より、公共事業の増大が顕著になってきています。このような状況の中で、これまで受け継がれてきた種々の文化遺産が煙滅しつつあります。これら先祖が観意きづいてきた文化遺産をいかに保存し、次代に継承していくかということも立派な都市行政問題であります。

昭和51年に茂庭住宅団地の計画が示され、それに基づいて、仙台市教育委員会では、住宅団地造成工事地内及びその周辺の分布調査を実施しております。昭和53年度に試掘調査が実施され、昭和54年度には「沼原・嶺山・梨野」地区の5遺跡7地点の発掘調査を実施し、縄文時代から平安時代までの各種の遺構が発見されています。

昭和55年度は昨年度に引き続き「沼原・嶺山・梨野」地区の7遺跡11地点の発掘調査を実施し、縄文時代の各種の上塙、平安時代の製鉄遺構等が発見され、大きな考古学的成果を上げています。本書は昭和55年度についてまとめ上げました貴重な報告書であります。

最後に調査に際して種々の御協力を賜わりました開発局宅地課の皆々様に御礼を述べるとともに、本書が学兄諸氏、市民の皆様の貴重な文献資料として永く後世に継承され、活用されますことを切に念願する次第であります。

昭和56年3月

仙台市教育委員会 教育長 藤井 黎

## 例　　言

1. 本書は、茂庭住宅開発工事に係る、沼原A遺跡・沼原B遺跡・沼原C遺跡・嶺山A遺跡・嶺山B遺跡・嶺山C遺跡・梨野A遺跡の発掘調査報告書である。尚、本調査は昭和55年4月7日に着手し、昭和55年11月28日に終了した。
2. 本書収録遺跡の発掘調査は、仙台市教育委員会社会教育課が担当した。
3. 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理発行の2万5千分の1「仙台西南部」を複製したものである。
4. 発掘調査にあたっては、東北歴史資料館技師岡村道雄、金城博物館学芸員野崎準の両氏の御教示を得た。
5. 本書作成にあたり、阿部朝衛（東北大学院生）、熊谷信一、木戸春夫、高橋研一、石垣純子、大野エリ子、叶文俊（以上東北大学院大学生）の各氏の協力を得た。
6. 本書の執筆、編集は佐藤甲二、篠原信彦、斎野裕彦、加藤正範が担当した。
7. 本年度調査区は、SCREEN-TONEで表した。
8. 本文の執筆担当者名は文末に記した。
9. 本書に関する遺跡からの出土遺物は仙台市教育委員会に一括保管してある。

## 目 次

調査概要	1
I. 沼原 A 遺跡	3
1. 遺跡の立地	2. 調査の方法
3. 調査の概要	4. まとめ
II. 沼原 B 遺跡	7
1. 遺跡の立地	2. 調査の方法
3. 調査の概要	4. まとめ
III. 沼原 C 遺跡	10
1. 遺跡の立地	2. 調査の方法
3. 調査の概要	4. まとめ
IV. 嶺山 A 遺跡	13
1. 遺跡の立地	2. 調査の方法
3. 調査の概要	4. まとめ
V. 嶺山 B 遺跡	19
1. 遺跡の立地	2. 調査の方法
3. 調査の概要	4. まとめ
VI. 嶺山 C 遺跡	23
1. 遺跡の立地	2. 調査の方法
3. 調査の概要	4. まとめ
VII. 梨野 A 遺跡	29
1. 遺跡の立地	2. 調査の方法
3. 調査の概要	4. まとめ



1. 桐木道跡
2. 梨野B道跡
3. 梨野D道跡
4. 青葉山道跡
5. 梨野横穴群
6. 茂庭大塚
7. カナクン道跡
8. けんとう城跡
9. 向根道跡
10. 奈  
館
11. 木尋道跡
12. 茂庭西塚
13. 向根東道跡
14. 向根横穴群
15. 磯岸道跡
16. 門野山田道跡
17. 坂ノ下道跡
18. 新桃野道跡
19. 町田道跡
20. 人来田A道跡
21. 人来田道跡
22. 町北東道跡
23. 西前道跡
24. 中ノ瀬道跡
25. 新組道跡
26. 人来田C道跡
27. 小塙西道跡
28. 人来田B道跡
29. 塩ノ瀬道跡
30. 川添東道跡
31. 大貝中道跡
32. 青木沢道跡
33. ノマヤマ道跡

第1図 茂庭住宅団地造成工事地区と周辺の道跡

## 調査概要

茂庭住七團地造成工事は、東西を名取川に向って北から南へ流れる大堤川・岩ノ川、南北を茂庭低地・梨野平坦面とする間にひろがる丘陵部の約130haを開発対象面積としている。これら丘陵地の標高は約100~200m程度で、その内部には窪地地形と称される大きく凹んだ場所が数ヶ所みられる。

昭和53年度の試掘調査に始まる発掘調査は、今年度で調査最終年度をむかえる。本格的に調査が行われたのは昨年度からで、5遺跡7地点がその調査対象となり、沼原A遺跡等より縄文時代、弥生時代、平安時代の住居跡、土壙、ビット、遺物包含層等が検出あるいは確認された。

今年度の発掘調査は昭和55年4月7日に開始され、11月28日までの約8ヶ月間調査が行われた。調査箇所は、昨年度よりの継続調査である沼原A遺跡第1・2地点、沼原B遺跡第1地点、嶺山A遺跡、梨野A遺跡と今年度新に調査した沼原B遺跡第2地点、沼原C遺跡、嶺山B遺跡、嶺山C遺跡第1~3地点から成る7遺跡11地点である。梨野A遺跡を除けば他は全て造成地内南部の「沼原」・「嶺山」両地区に調査箇所が集中している。調査対象総面積約15,500m<sup>2</sup>、発掘総面積は6,500m<sup>2</sup>にのぼる。

「沼原」・「嶺山」地区の調査ではほとんどの遺跡より縄文時代の遺物包含層が確認され、縄文時代の遺構として沼原A遺跡第2地点(2基)、嶺山A遺跡(6基)、嶺山B遺跡(1基)の各遺跡より、昨年度沼原A第1地点で出土した上墳(中段を有する土壙で、平面形が上端幅円形、中段・下端が隅丸長方形を呈し、上端190×150cm、中段150×60cm、下端140×40cm・深さ160m前後のもので、覆土内よりはほとんど遺物を出土しない)とほぼ同様な形態・規模のいわゆる「Tビット」・「階穴」と呼ばれている土壙(以下文中に於いては、この種の土壙は全て「Tビット」という名称を用いることとする)が検出された。「Tビット」が今回谷部分(沼原A第2地点・嶺山A)より検出されたことは、その性格を考える上で興味を引く。

嶺山C遺跡第2地点よりは平安時代の製鉄跡が検出された。製鉄跡の調査では時代を決定する遺物の出土が数少ない上に、東北地方では製鉄跡の調査事例が希である。しかるに、当遺跡が遺構内伴出遺物によって時期決定が可能であることは貴重な資料といえる。

「梨野」地区的梨野A遺跡の調査では、縄文時代早期~後期・古墳時代中期の遺物が出土し、縄文時代中・後期を中心とする多数の土壙、ビットが検出され、調査外地区に住居跡群のある可能性を濃厚にした。

以上のような本年度成果をもって茂庭造成団地内遺跡の調査は完了した訳であるが、梨野A遺跡は本年度調査区外の部分が保存される見通しとなり、来年度範囲確認調査が行われる予定である。

(佐藤甲一)



1. 沼澤A第1地点 2. 沼澤A第2地点 3. 沼澤B第1地点 4. 沼澤B第2地点  
 5. 沼澤C 6. 猿山A 7. 猿山B 8. 猿山C第1地点  
 9. 猿山C第2地点 10. 猿山C第3地点 11. 梨野A

第2図 1980年度調査地点

# 沼原A遺跡

(C-247)

遺跡所在地：仙台市茂庭字沼原28

調査期間：第1地点 昭和55年4月8日～4月20日

第2地点 昭和55年4月24日～6月14日

対象面積：第1地点 600m<sup>2</sup> 第2地点 740m<sup>2</sup>

発掘面積：第1地点 110m<sup>2</sup> 第2地点 740m<sup>2</sup>

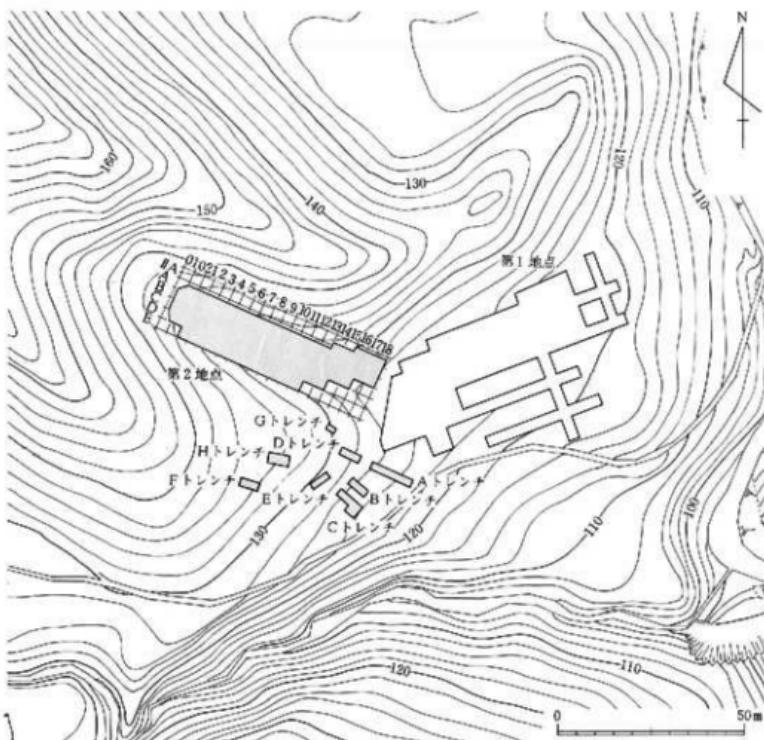
担当職員：斎野裕彦・佐藤甲二

## 1. 遺跡の立地

沼原A遺跡は、造成地南東端の丘陵中段に位置し、標高120~125mの間にひろがる平坦部分（第1地点）と、この北西奥の全長約60m、幅15mの谷部分（第2地点）から成る。沢をはさんだ南西側には峯館がそびえ、この沢の上流約150mには嶺山C遺跡が位置する。昨年度調査の結果、第1地点では、平安時代の住居跡1棟、縄文時代の「Tピット」6基が検出され、第2地点（試掘調査）では、平安時代の包含層と縄文時代の土壙1基が確認された。

## 2. 調査の方法

- 第1地点 昨年度調査住居跡の南西側と西側の丘陵緩斜面上に数ヶ所みられる狭い平坦部分を調査対象とし、幅2~4mのトレンチ7本（A~G）を設定し調査を行う。
- 第2地点 谷全体を調査対象とし、昨年度設定グリッド（3×3m）により調査を行う。



第1図 グリッド・トレンチ配置図

### 3. 調査の概要

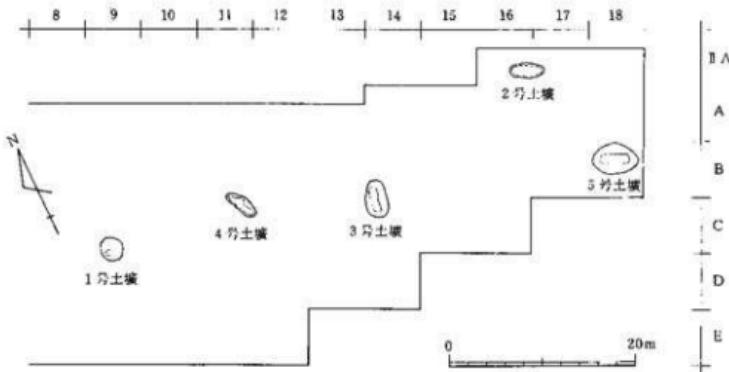
第1地点では耕作土（約10~20cm）下が地山となり、Cトレーナで時期不詳の小土壤を1基検出した以外は、遺物、遺構は検出されなかった。第2地点では、基本層位が第I層耕作土から第VII層地山までの7層からなる。第IV層から平安時代、第V層下部・第VI層よりは縄文時代前期~晚期の遺物を出土する。平安時代の遺構は検出されなかったが、縄文時代の土塙5基と若干の焼土のひろがり1ヶ所が検出された。

〈土壤〉第2地点より5基検出された。これらは上端約200×150cm深さ約150cmの「Tピット」（3・5号）、底面に小ピット1つを伴い、上端（180×70cm）下端とも隅丸長方形の平面プランを呈し深さ約25cm前後の浅い土塙（2・4分）。そして斜めに掘り込まれた上端（径約140cm）下端とも不整円形の平面プランを呈す深さ120cmの土壤（1号）の三形態に大別される。これら土壤は堆積土より遺物を出土しなかったが、第VI層中より掘り込まれており縄文時代晚期以前の時期に所属するかと思われる。

### 4.まとめ

○第1地点では、時期不詳の土塙が1基検出された以外、平安時代の遺物・遺構のひろがりはみられない。斜面上の狭い平坦部分は、耕作によって造り出されたものと考えられる。

○「Tピット」は、沼原A道跡全体では8基を数え、昨年度調査では平坦面と北側丘陵際に形成された深い谷部分に、今年度調査では谷部分で検出されている。当道跡での「Tピット」の配置をみると限り「谷地形」を選定しているようにも考えられる。また、今年度調査では第2地点より、「Tピット」と同時性の可能性を持つ形態の異なる土壤が3基検出され、今後、これら土壤も含めた上で「Tピット」の性格を考えて行く必要があると思われる。（佐藤甲二）



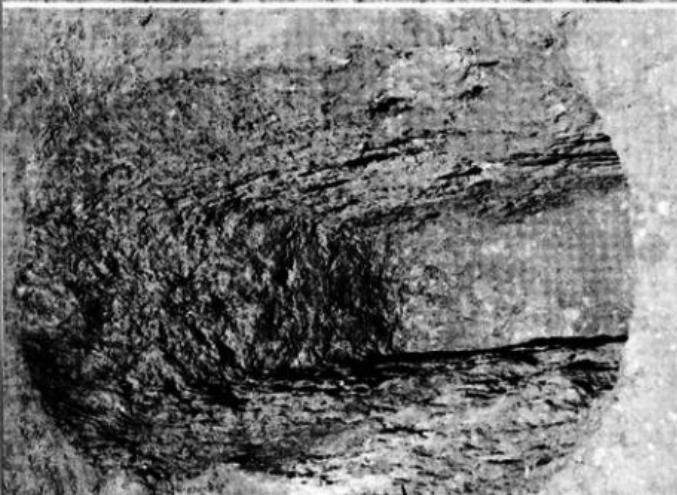
第2図 遺構配置図



1. 通 景  
(北側丘陵より)



2. 2号土 墓  
(東より)



3. 3号土 墓  
(南より)

# 沼原B遺跡

(C-245)

遺跡所在地：仙台市茂庭字沼原30

調査期間：第1地点 昭和56年6月16日～8月19日

第2地点 昭和55年4月23日～4月26日

対象面積：第1地点 300m<sup>2</sup> 第2地点 900m<sup>2</sup>

発掘調査：第1地点 300m<sup>2</sup> 第2地点 120m<sup>2</sup>

担当職員：斎野裕彦・加藤正範

## 1. 遺跡の立地

沼原B遺跡は、造成地のほぼ中央部南側の窪地に位置する。標高160~165m、周囲の丘陵との比高は約20~40mである。遺跡の南東100mに沼原C遺跡南西400mに嶺山B遺跡がある。

昨年度調査ではA-2・3グリッドで時期不明の集石、C・D-7~9グリッドで縄文時代晩期及び弥生時代中期の遺物、それと同時期と思われるビット群が検出されている。

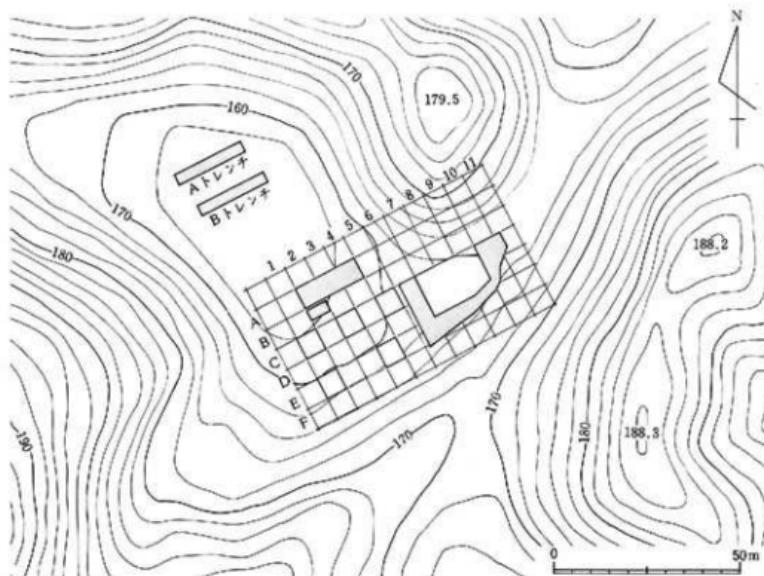
## 2. 調査の方法

○第1地点 窪地南側の昨年度調査区の周辺を対象とし、 $6 \times 6$ mのグリッド（昨年度設定）により調査を行う。

○第2地点 窪地中央部湿地帯の北側を対象とし、 $3 \times 20$ mの2本のトレンチを設定し、調査を行う。

## 3. 調査の概要

第1地点の基本層位は第I層耕作土から第IV層地山までの8層から成り、第V層中より主に縄文時代中期の遺物が出土した。また地山上面において土壙一基が検出された。集石下面の精査及び周辺部の調査では、遺物・遺構は検出されず、集石の時期も非常に新しいことが判明した。また集石は自然堆積の可能性も考えられる。第2地点では遺物・遺構は検出されなかった。



第1図 グリッド・トレンチ配置図

〈土壤〉 C-10グリッドの北西コーナーに位置する。184×110cmの楕円形で深さ38cm、底面は舟底状を呈す。遺物は皆無であったが、掘り込み面が第VI層中と考えられ、時期は縄文時代と思われる。

#### 4. まとめ

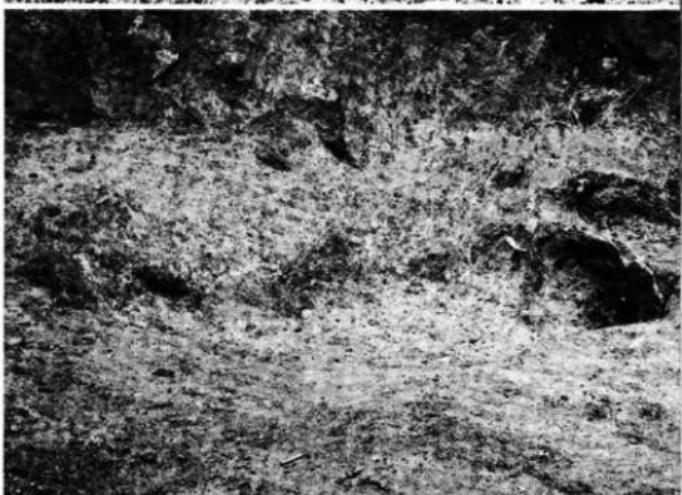
第1地点ではピット群の広がりは確認されなかった。土壌とピット群との関係については本報告に委ねることにしたい。また第2地点の調査結果により、沼原B遺跡においては窪地の中でも遺物・遺構の集中する比較的標高の高い東南隅が選ばれ、何らかの生活の場としての役割を果していたであろうことが推察される。

(斎野裕彦)

1. 第1地点遠景  
(南東より)



2. 土 壌  
(南より)



# 沼原C遺跡

(C-248)

遺跡所在地：仙台市茂庭字沼原28

調査期間：昭和55年6月19日～9月11日

対象面積：2800m<sup>2</sup>

発掘面積：530m<sup>2</sup>

担当職員：加藤正範・佐藤甲二・斎野裕彦

## 1. 遺跡の立地

沼原C遺跡は標高160～165mの丘陵に囲まれた谷地形に位置し、周囲の地形と比べると高低差が約25～40mある。遺跡の西100mの地点に嶺山A・B遺跡があり、北100mの地点には沼原B遺跡がある。

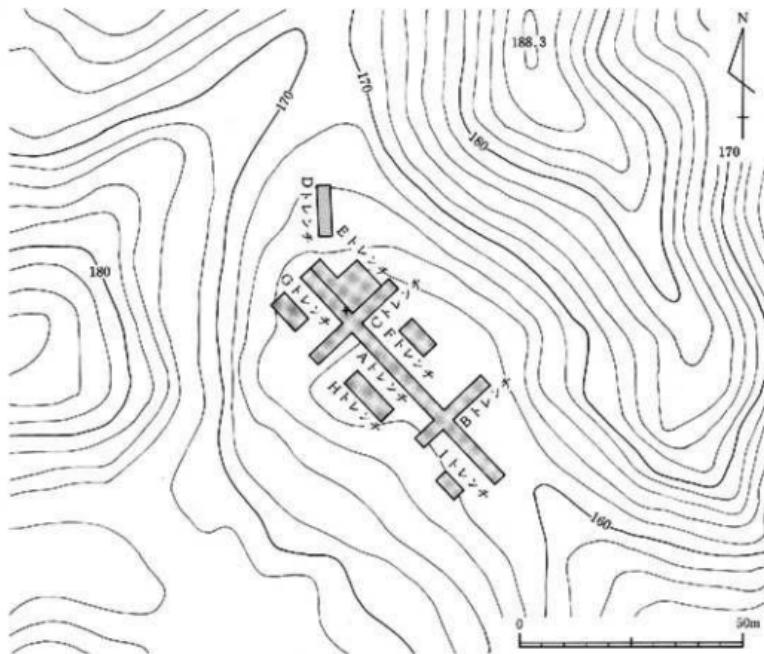
## 2. 調査の方法

地形に沿う形でA～Dトレンチを設定し、Aトレンチ（×印地点）より土壤を検出したためE～Iトレンチを新たに拡張した。

## 3. 調査の概要

基本層位は第I層耕作土から第V層粘土質の地山までの5層から成る。IVa層より縄文時代中期の遺物を出土する。検出された遺構はAトレンチ（×印地点）の土壤1基であり、拡張したトレンチからは遺物・遺構の検出は見られなかった。

〈土壤〉 IIb層中より掘りこまれ、上端80×70cm、下端60×40cm、深さ25cmを有する。底部外周には、焼土が数cmの厚さで回っており、堆積土内から多量の木炭と小動物らしい骨片が出土



第1図 トレンチ配置図

した。時期、性格は不明であり、今後検討を要する。

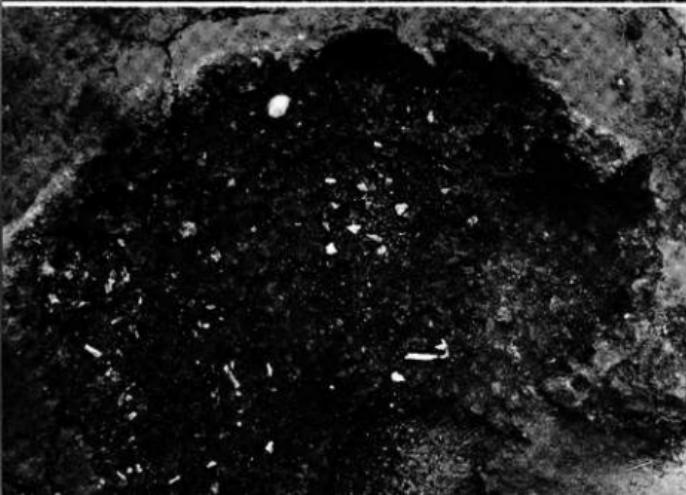
#### 4.まとめ

- 検出された遺構は焼土、木炭、骨片を含む時期、性格不詳の土壙1基だけであった。
- 縄文時代中期の遺物が出土したが、これに伴う遺構は検出されなかった。当遺跡が谷地形であることを考えると、出土遺物は隣近地域からの流れ込みである可能性が強い。
- 同じ様な谷地形の嶺山A遺跡では「Tピット」が8基検出されているにもかかわらず、当遺跡では全く検出されなかった。このことは「Tピット」の配置を考えいく上で大切な要素となるであろう。

(加藤正範)



1. トレンチ全景  
(北西より)



2. 土 壙  
(南西より)

# 嶺山 A 遺跡

(C-246)

遺跡所在地：仙台市茂庭字嶺山19

調査期間：昭和55年9月1日～11月6日

対象面積：2300m<sup>2</sup>

発掘面積：1920m<sup>2</sup>

担当職員：斎野裕彦・佐藤甲二・加藤正範

## 1. 遺跡の立地

嶺山A遺跡（昨年度の嶺山遺跡西区）は沼原A遺跡の北西450m、沼原B遺跡の南150mに位置し、丘陵に三方を囲まれた北東へ開く幅25m長さ90mの谷地形を呈している。標高は165～172m、周囲の丘陵との比高は10～20mである。昨年度の試掘調査では縄文時代の遺物及び土壌のプランが確認されている。尚、北側丘陵中段には嶺山B遺跡がある。

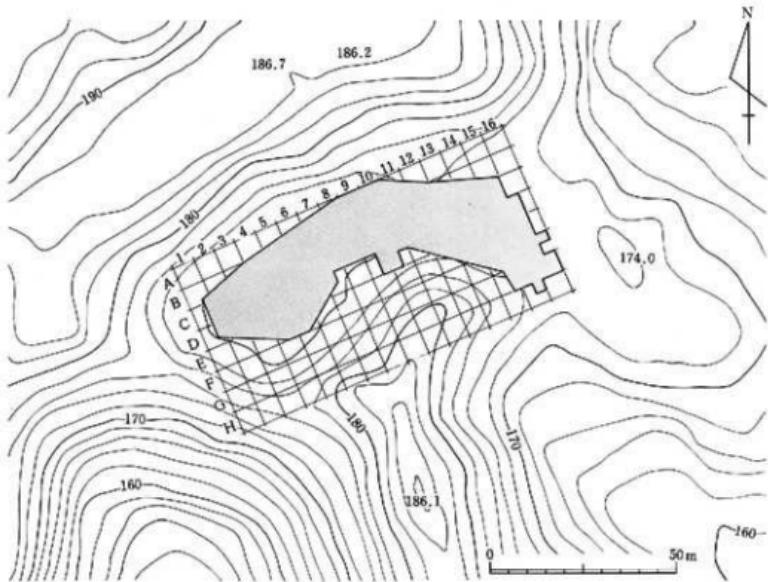
## 2. 調査の方法

昨年度の試掘に際して設定された $6 \times 6$ mのグリッドにより調査を行う。（谷に沿うラインを横軸：1～16、直交するラインを縦軸：A～Hとした）

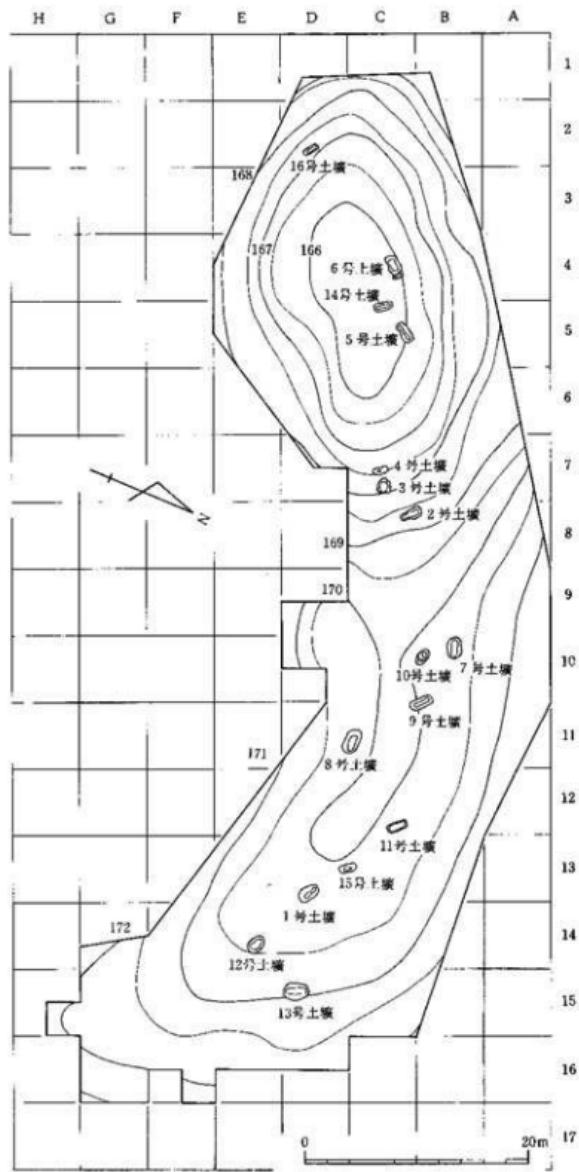
## 3. 調査の概要

基本層位は第I層耕作土から第VII層地山までの8層から成る。第I層から第IV層までは無遺物層で、第V層から平安時代の遺物が、第VI層・第七層からは縄文時代の遺物が出土した。第V層と第VI層との間には所々灰白色の火山灰層が入る。第VII層の出土遺物は縄文時代後期及び晩期に所属する。

造構は地山上面において16基の土壙が検出された。配置は第2図に示す通りである。16基中8基が「Tピット」である。（1・5・7・8・9・13・14・16号土壙）礫層を掲げ抜いている



第1図 グリッド配置図



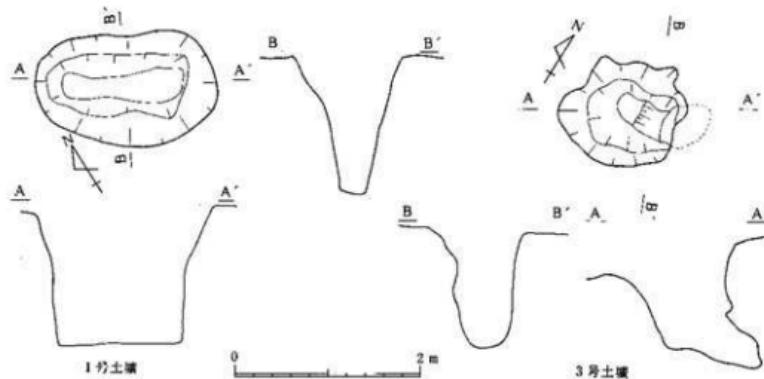
第2図 遺構配置図（等高線は地山面）

ものには、底面及び壁面に凹凸の見られることもある。規模は大きいもので上端234×160cm、小さいもので158×58cm、深さは98~178cmである。また上端平面形及び規模は「Tピット」に類似するが、深さ30~40cmの浅い土壌が6基検出されている。(2・6・10・11・12・15号土壌)底面は舟底形のものと凹凸のものがあり、堆積土に焼土の入るものもある。他の2基、3号、4号土壌は上端平面形が円形及び梢円形で斜めに掘り込まれ、底面に移行するに従い墳径が小さくなる。3号土壌は上端134×102cm、深さ132cm、4号土壌は上端134×64cm深さ52cmである。

#### 4.まとめ

- 嶺山A遺跡はC-4グリッド周辺が最も低く、東から西への傾斜をもつ。検出された16基の土壌の多くは谷中央の平坦面から緩斜面に配されている。
- 土壌の時期は堆積土からの遺物の出土が皆無に等しく明確でないが、土壌内に第VII層が堆積しているものがほとんどであり、縄文時代晩期以前と考えられる。土壌には形態差が認められ、沼原A遺跡第1地点、第2地点で検出された11基の土壌の中にも同様の形態差が見られることから、同一時期にこれらの土壌が存在した可能性がある。土壌はすべて自然堆積により埋まっている。
- 「Tピット」には堆積土最下層が地山崩壊土のものと第VII層のものがあり、両者の上端平面形に相違が見られる。これは嶺山A遺跡において得られた新知見である。
- 嶺山A遺跡は谷地形ということもあり、人間の居住の場とは考えにくく、今後土壌の性格の解明が遺跡の性格を知る上で大きなポイントとなるであろう。

(斎野裕彦)



第3図 土壌実測図

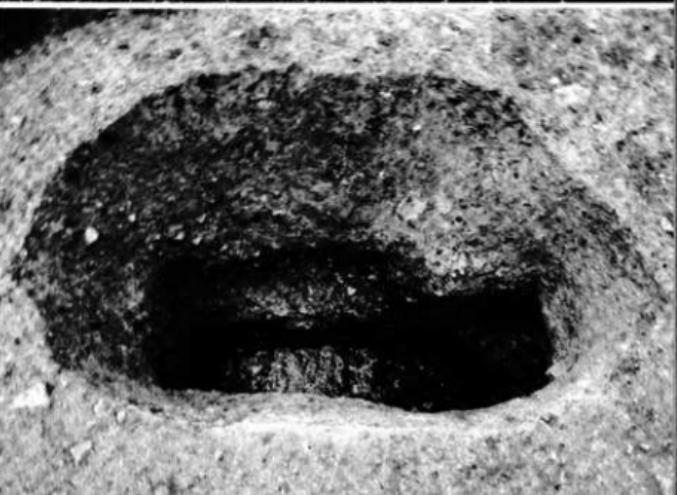
1. 全 景  
(南より)



2. 全 景  
(北より)

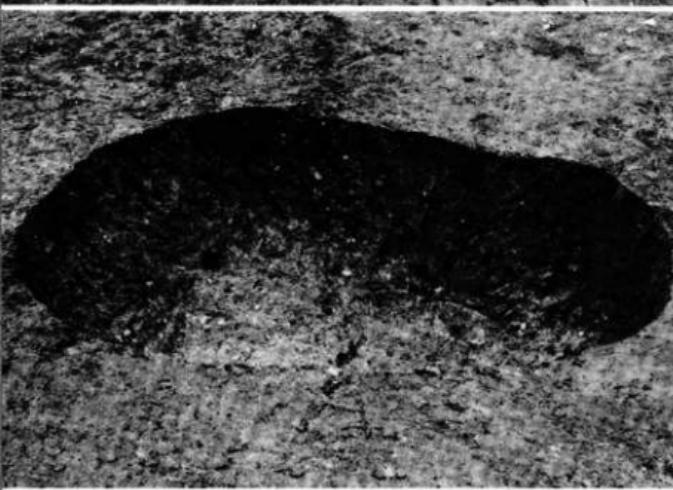


3. 8号土壤  
(北より)

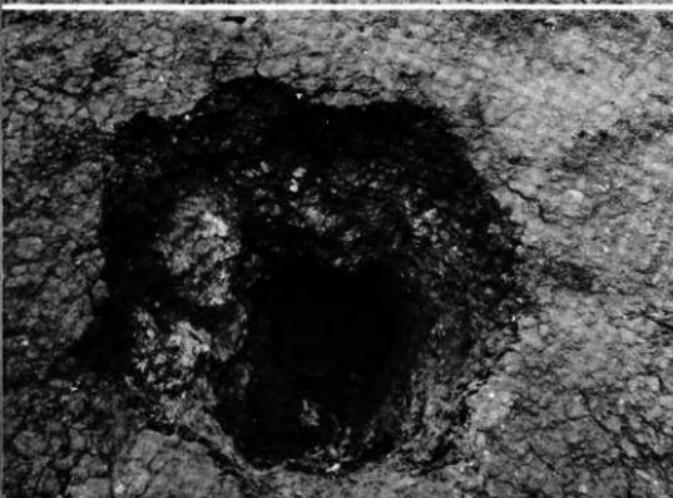




4. 2号土壤  
(南西より)



5. 12号土壤  
(北東より)



6. 3号土壤  
(南西より)

# 嶺山B遺跡

(C-293)

遺跡所在地：仙台市茂庭字嶺山26

調査期間：昭和55年7月26日～9月1日

対象面積：2000m<sup>2</sup>

発掘面積：560m<sup>2</sup>

担当職員：佐藤甲二・斎野裕彦・加藤正範

## 1. 遺跡の立地

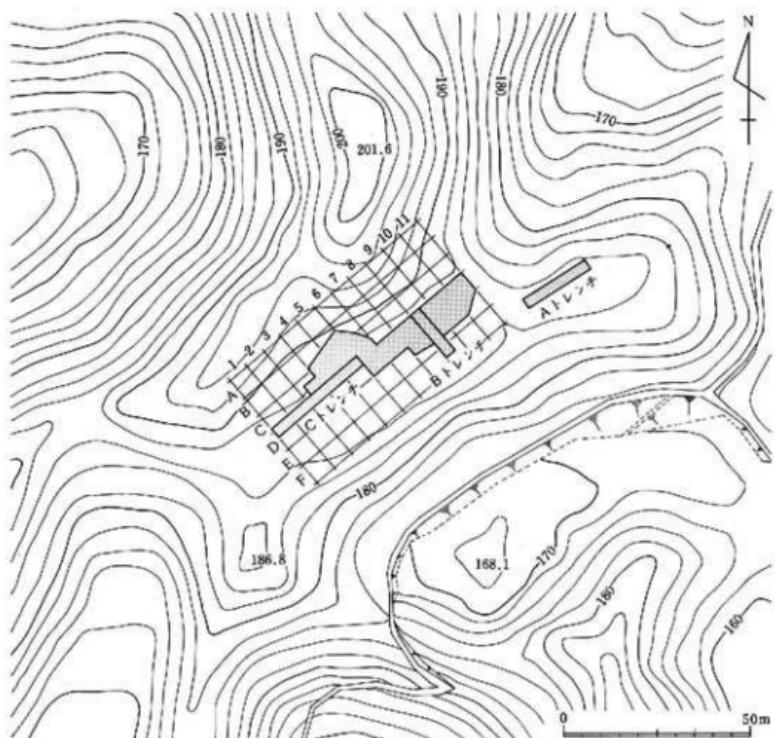
嶺山B遺跡は丘陵北東側斜面の標高186~189mの間に形成された、幅約20m程の細長い平坦面（約2,000m<sup>2</sup>）上に位置する。北東、南東、南西の三方向は谷、窪地に至る急斜面となる。当平坦面は以前開墾を受けており、また調査前まで道路部分になっていた場所である。南東の谷には嶺山A遺跡が、北東の窪地には沼原B遺跡が位置する。

## 2. 調査の方法

幅3mの試掘トレンチA~C（長さ12・9・30m）の調査結果より、縦軸A~F、横軸1~11とする6×6mグリッドによる調査に変更し、拡張調査を行う。

## 3. 調査の概要

A・Cトレンチとも遺物、遺構は検出されず、表土（約5~20cm）下がすぐ地山面となる状態であった。Bトレンチでは第I層表土から第VI層地山までの6層が確認され、第V層中より



第1図 グリッド・トレンチ配置図

縄文土器片が若干出土し、土壙1基が検出された。この為、第V層堆積部分（ほぼ第2図破線内）を調査の主体としたが、第V層中よりわずかに縄文時代中期～晩期の遺物が出土したのみであった。

〈土壙〉上端約250×120cm、下端約150×70cm、深さ約120cmの規格を有する「Tピット」で、出土遺物は皆無であった。土壙は第V層中より掘り込まれており、縄文時代晩期以前の時期に所属するかと思われる。

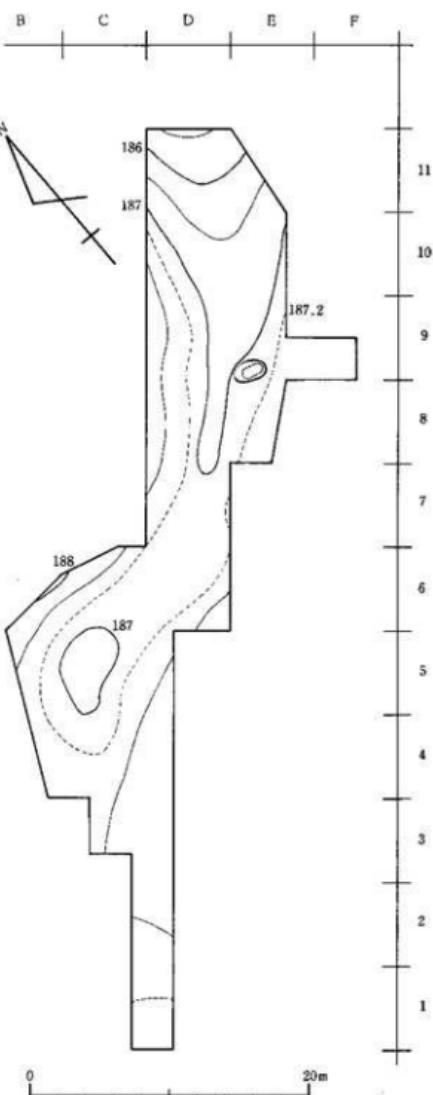
#### 4.まとめ

- 調査の結果、この平坦面は以前にかなりの削平、擾乱を受けており、旧地形は現地形より平坦部分がかなり狭かったのではないかと思われる。

- 平坦部奥の丘陵際との間に走る浅い谷状の部分より、縄文時代中期から晩期にわたる遺物包含層と、縄文時代晩期以前と考えられる「Tピット」1基が検出された。

- 「Tピット」が1基しか検出されなかったこと、そして沼原A遺跡第1地点出土の「Tピット」6基とほぼ同様な地形から検出されたことは、この種の土壙の性格を考える上で、貴重な資料の追加といえる。

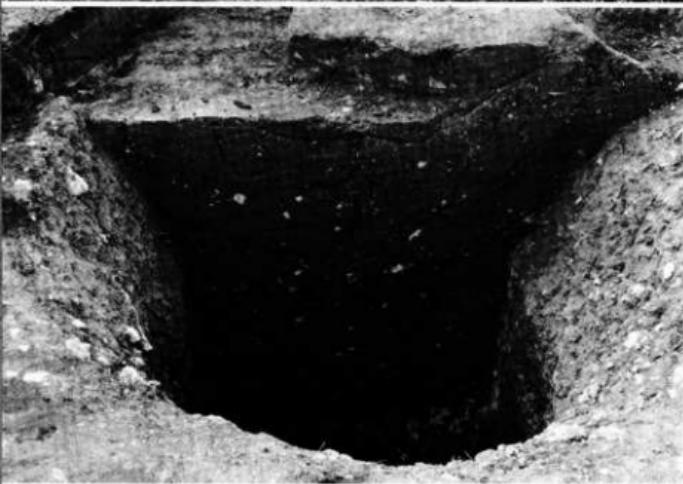
（佐藤甲二）



第2図 造構配置図 (等高線は地山面)



1. 全 景  
(南東より)  
下は嶺山A遺跡



2. 土 壤 セクション  
(南東より)



3. 土 壤  
(北西より)

# 嶺山C遺跡

(C-249)

遺跡所在地：仙台市茂庭字嶺山15、16、20

調査期間：第1地点 昭和55年4月14日～4月22日

第2地点 昭和55年9月16日～11月28日

第3地点 昭和55年4月29日～5月1日

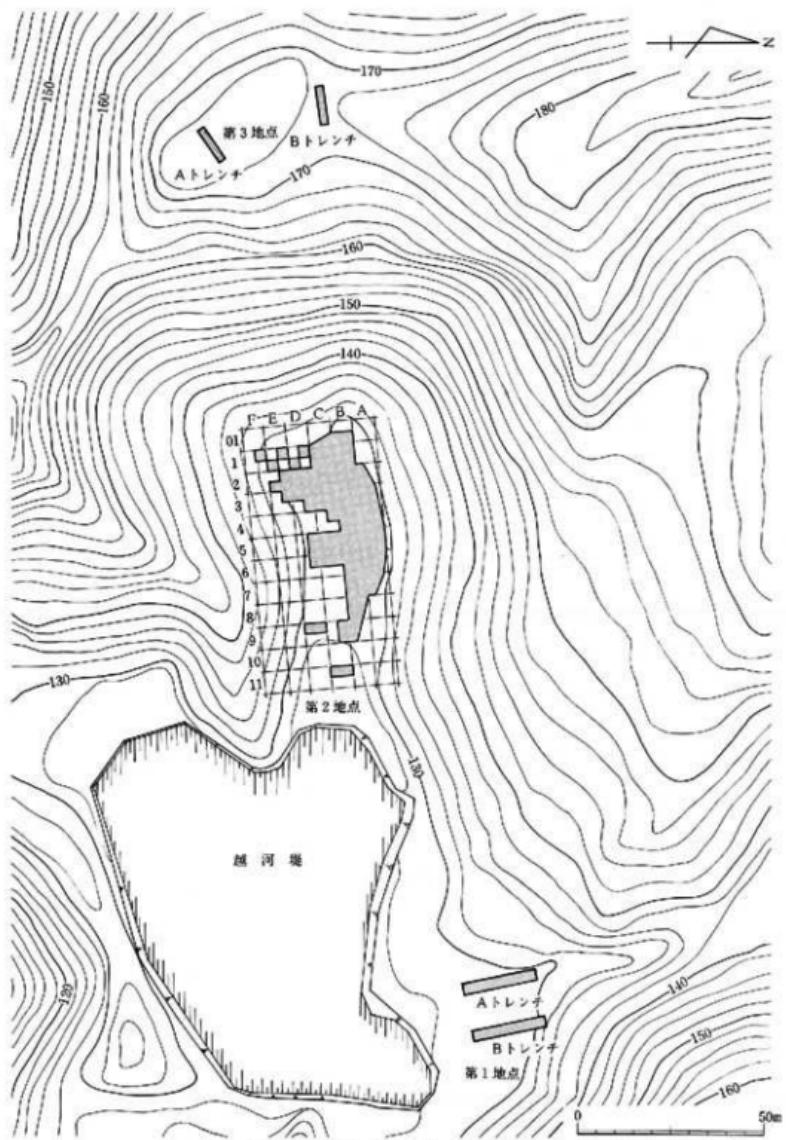
対象面積：第1地点 1200m<sup>2</sup> 第2地点 1400m<sup>2</sup>

第3地点 800m<sup>2</sup>

発掘面積：第1地点 120m<sup>2</sup> 第2地点 900m<sup>2</sup>

第3地点 40m<sup>2</sup>

担当職員：佐藤甲二・加藤正範・斎野裕彦



第1図 グリッド・トレンチ配置図

## 1. 遺跡の立地

造成地内ほぼ南端に位置する越河堤は、東へのびる深い沢の上流部を堰止め作られた、人工の農業用貯水池である。この沢を除く三方は丘陵に囲まれている。堤北岸には、標高128~130mの間に形成された、緩やかに南へ傾斜する平坦面（第1地点）が、西岸には、標高130m前後の東西に細長い、約1,600m<sup>2</sup>の谷（第2地点）がある。この谷の西方は、標高差約40mの丘陵となり、頂部上には若干の平坦面（第3地点）が見られる。堤南東には、北側を自然の沢で利用した峠館が、沢の下流約150mの北側丘陵中段平坦面には、沼原八遺跡が位置する。

## 2. 調査の方法

- 第1地点 ほぼ南北方向に2本の3×20mトレンチ（A・B）を設定し、調査を行う。
- 第2地点 南北軸をA~F、東西軸を1~11とする6×6mグリッドによる調査を行う。
- 第3地点 ほぼ東西方向に2本の2×10mトレンチ（A・B）を設定し、調査を行う。

## 3. 調査の概要

第1・3地点とも何ら遺物、遺構を検出することはできなかった。第1地点では、耕作土下から地山上までの間、砂層が何重にも堆積し、この地区が以前まで水の流路であった様相を示す。第3地点では、数cmの表土下が地山となり、地山上にほとんど堆積土がみられない状態であった。第2地点に於いては、基本層位が第I層耕土から第VII層地山までの7層から成る。第IV層中には、多くの平安時代の遺物が含まれ、A-3~6グリッドより製鉄関係の遺構が検出された。第VI層中よりは、若干の绳文時代の遺物が出士したが、遺構は検出されなかった。  
(製鉄関係遺構) 谷北側の丘陵際緩斜面上に、幅約3~5m、長さ約27mの東西に細長い平場が造り出され、中央部で地山の張り出し部がみられるため、平場は東西に二分されているようにもみえる。平場の東側、西側の南端には、小規模な溝が東西に走っている。平場内には、炉1基、カマド1基、小土壙2基、ピット多数が検出され、西端の浅い周溝らしきもの内よりは多量の木炭、炉の東側・西側（A-5グリッド南東・南西コーナー付近）よりは多量の焼土が出上した。炉東側焼土内より炉壁片がまた炉南側B-5・6グリッドを中心として多量の鉄滓と共に数点の羽口片が出土している。

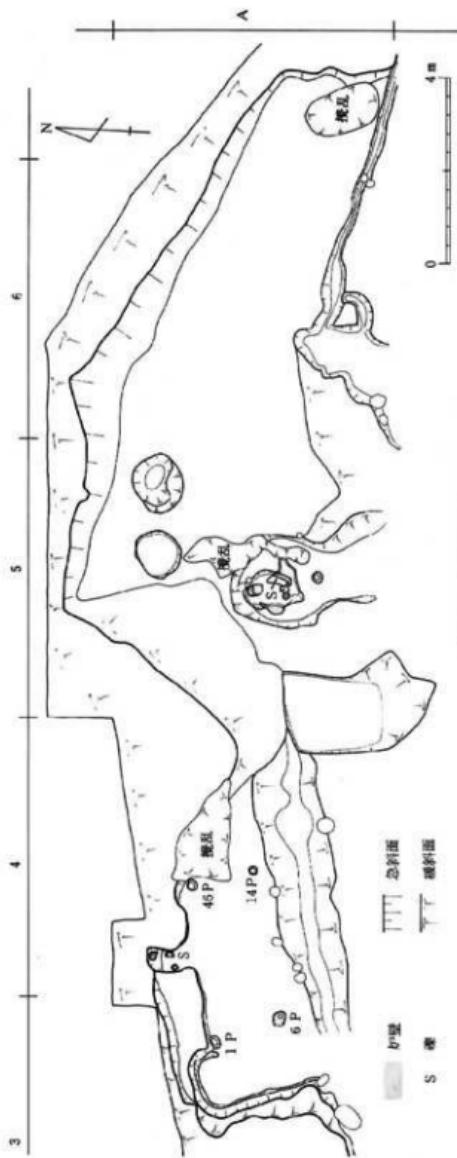
○炉：平場中央部より多量の焼土と共に検出された。炉上部はほとんど損われた状態で、炉壁の最下部と炉床の一部、そして炉壁の強化あるいは羽口の支えとも考えられる角礫・円礫が数個検出された。炉壁は残りの良い場所で高さ14cm、厚さ18cm（炉床と接する部分）を測る。炉はその残存形態より推測するに、径40~60cmの円形あるいは梢円形を呈するものかと思われる。

○カマド：平場東側の北壁に位置する。北壁をくり抜き構築されており、奥壁上部には煙出部が、内部より支脚用の角礫が直立した状態で検出された。焚き口を中心として、数cmの厚さに

1. 平塙全景(南より)



第2図 通構平面図



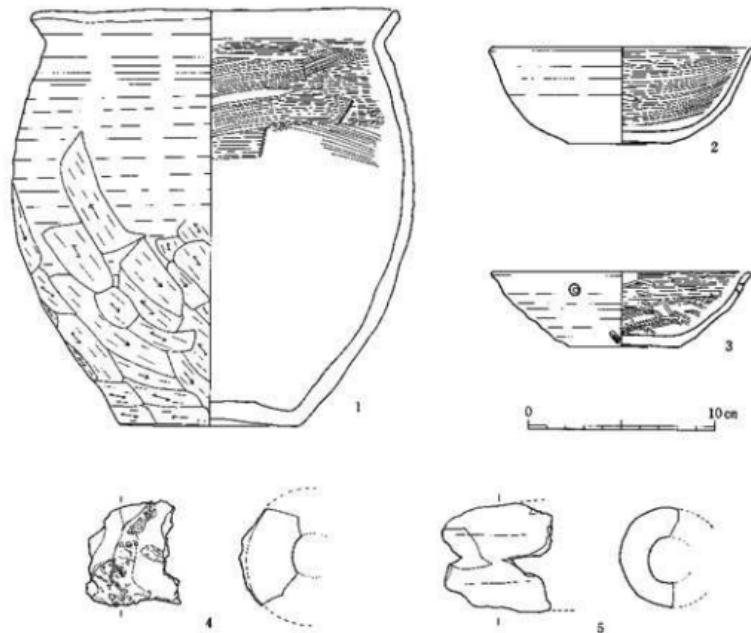
堆積した焼土と共に、数個体分の土師器片が出土した。カマド南側には、深さが約50cm前後の特に深いピット（1号・6号・14号・46号）が、ほぼ長方形状に並んでいる。

#### 4.まとめ

○第1・3地点では何ら遺物・遺構は検出されず、土層堆積状況をみる限り、両地点には遺跡の可能性は望めないといえる。

○第2地点の出土遺物（鉄滓・羽口片・炉壁片・木炭）がと多量の焼土の検出により、谷の北側に造り出された平場と、その内側より検出された各種の遺構は、製鉄に関連するものと思われ、炉上部及びカマド内出土の土師器の年代より、当遺跡は平安時代の製鉄跡であると考えられる。ただし、調査区内より炭窯の検出はみられなかったが、この谷の隣接地域に炭窯が作られた可能性は強い。

（佐藤甲二）



1. 土師器片(カマド内出土) 2. 土師器片(A-3グリッド平場内出土) 3. 土師器片(炉内出土)  
4. 炉口片(B-6グリッド出土、先端部鉄滓付着) 5. 羽口片(B-6グリッド出土)

第3図 遺物実測図



2. 第2地点遠景  
(東より)



3. 炉  
(西より)



4. カマド  
(南より)

# 梨野 A 遺跡

(C-180)

遺跡所在地：仙台市茂庭字大堤22

調査期間：昭和55年4月7日～8月8日

対象面積：2400m<sup>2</sup>

発掘面積：970m<sup>2</sup>

担当職員：藤原信彦・佐藤中二・加藤正範・斎野裕彦



第1図 グリッド配置図

## 1. 遺跡の立地

梨野A遺跡は造成地内の北東隅、県道菅生・折立線が梨野東地区で大きく東へ屈曲した地点より西側に約100mの付近にある。遺跡は丘陵より北側に張り出した緩かな舌状平坦上に位置している。標高は180~190mである。

昨年度は西側斜面の調査を行い、表土直下ですぐ地山となり、磨滅した土器片が少量出土した以外は何の遺構も検出されなかった。東側斜面及び平坦面上には以前から土器片、石器が多く採集されており、何らかの遺構が存在するものと考えられていた。

## 2. 調査の方法

本年度の調査は昨年度調査区の東側に接する緩い東側斜面で、造成工事に伴う部分を調査対象とした。調査区は昨年度のグリッド配置をそのまま使用し、 $6 \times 6\text{ m}$ のグリッドを南北軸(A~R)、東西軸(1~17)として調査を行った。

## 3. 調査の概要

調査区内における基本層位は第I層(表七)から第IV層(地山)の4層から成る。第II・III層は遺物包含層で、第II層より縄文時代中期・後期、第III層より縄文時代早期・前期の遺物が出土する。遺物は平箱にして約100箱程度出土し、土師器壺1個体以外は全て縄文時代の遺物である。特に第II層中より多くの遺物が出土した。縄文時代の遺物は土器片が圧倒的に多く、次は石器である。検出遺構は土壙約30基、ビット約120基、剣片集中部分1箇所、性格不明の溝状遺構1条がある。

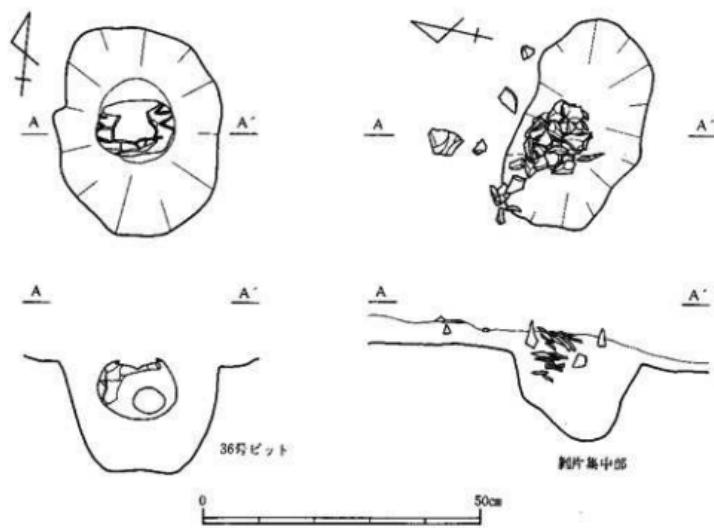
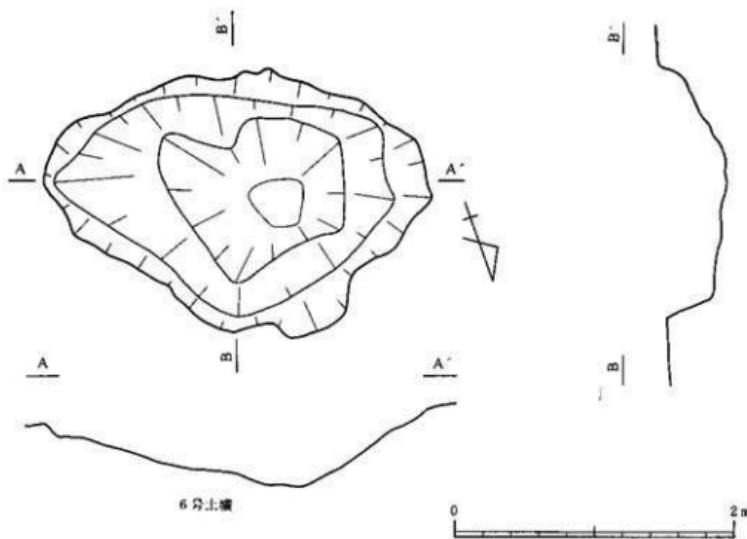
〈上壙〉調査区内より約30基の上壙が検出された。大きく見て土壙は2つの地区に集中して検出された。1つはJ・K-7・8グリッドであり、他はM・N-6・7グリッドである。いずれも土壙・ビットなどと重複しているものがほとんどである。

これらの上壙は平面形がほとんど楕円形、長楕円形を呈し、断面形はU字形を呈するものが多い。土壙はその規模によって、大形、中形、小形の3つに分けられる。なお、形状によつても細分は可能である。

○大形の土壙：これに属するものは大きさが3mを超えるもので、約5基が検出されている。1基を除いてJ・K-7・8グリッドに位置している。平面形は楕円形、長楕円形、円形のものがあり、深さは20~60cmを超えるものまであり、一様ではない。この中で規模が最大なもの(2号)は長軸396cm、短軸234cmを測る長楕円形を呈し、深さは60cmを測る。

○中形の上壙：これに属するものは大きさが2~3m以下のもので、約6基が検出されている。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈するものが多い。深さは20~60cmを測るものまであり、一様ではない。

6号土壙はこれに属し、J-7・8グリッドで検出された。平面形は楕円形状を呈し、長軸



第2図 遺構実測図

280cm、短軸190cmを測る。断面形はU字形あるいは槽鉢状を呈し、深さ54cmを測る。壁の立ち上がりは緩い傾斜をもつ。

○小形の土壙：これに属するものは大きさが1～2m以下のものであり、約10数基が検出されている。これらの土壙の多くはM・N-6・7グリッドに検出されている。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈するものが多く、深さは10～50cmを測るものである。

〈ピット〉調査区内より約120基のピットが検出されたが、大きさ1m以下のものをピットとして調査したために土壙に分類されるものも含んでいる。平面形は円形、楕円形を呈し、大きさも20～60cmのものまである。

36号ピットはK-8グリッド北西隅に検出され、平面形は楕円形で長軸37cm、短軸30cmを測る。断面形はU字形で深さ20cmを測る。遺物は繩文土器・鉢1個体がピット上面に横倒した状態で出土しただけである。

〈剝片集中部分〉K-16グリッド北東隅より検出された。約100点程の石器等の剝片石器と剝片が、径15cmの範囲に集中し、かつ重なった状態で出土した。検出面では木炭粒のひろがりがみられただけで、これに伴う明瞭な遺構のプランは検出されなかった。約5cm下げた段階では長軸約40cm・短軸約10cmの楕円形状を呈する落ち込みがみられたが、この落ち込み自体形状がしっかりしておらず、明確に剝片・剝片石器に付随する落ち込みとは断定出来ない。

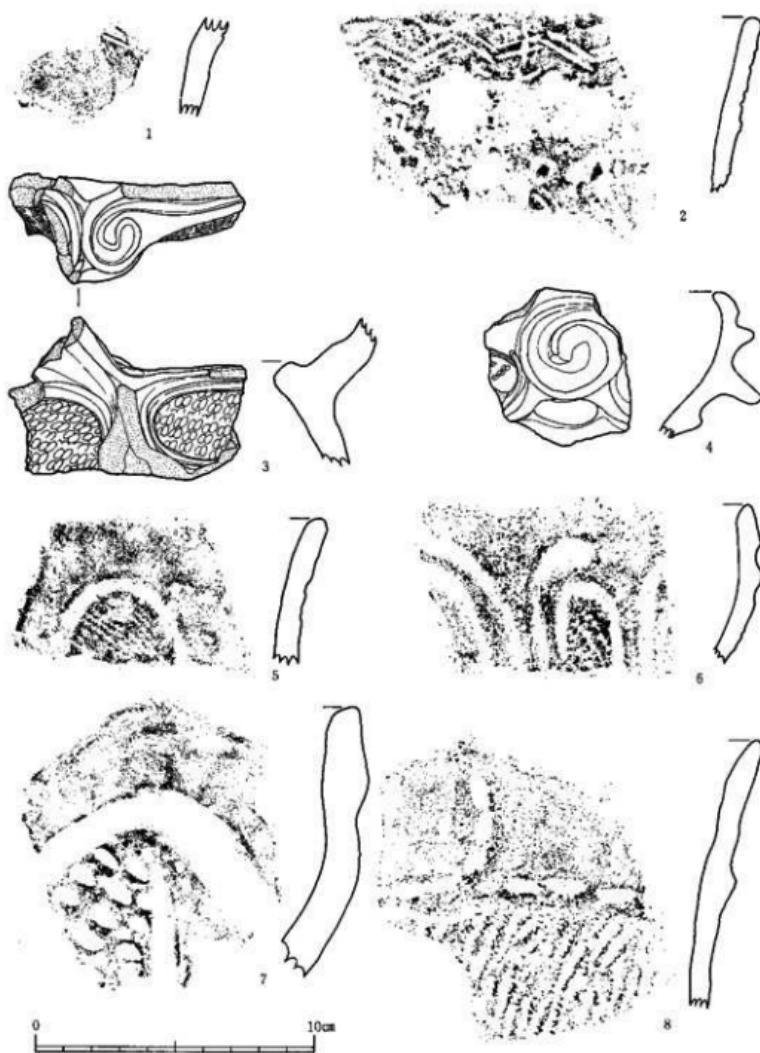
#### 4.まとめ

○調査区内より繩文中期・後期を主体とする多量の遺物とともに多数の土壙、ピットが検出された。土壙はその規模より大形、中形、小形の3つに分けられる。これらの土壙は造成地内の沼原A遺跡、嶺山A・B遺跡で検出されている「Tピット」とは形態、規模、性格において異なった様相を呈している。また1箇所に約100点ほどの剝片及び剝片石器が集中して出土したことは特記される。

○以前の表面採集では得られなかった繩文時代早期及び古墳時代中期の遺物が、今回の調査によって新に出土した。

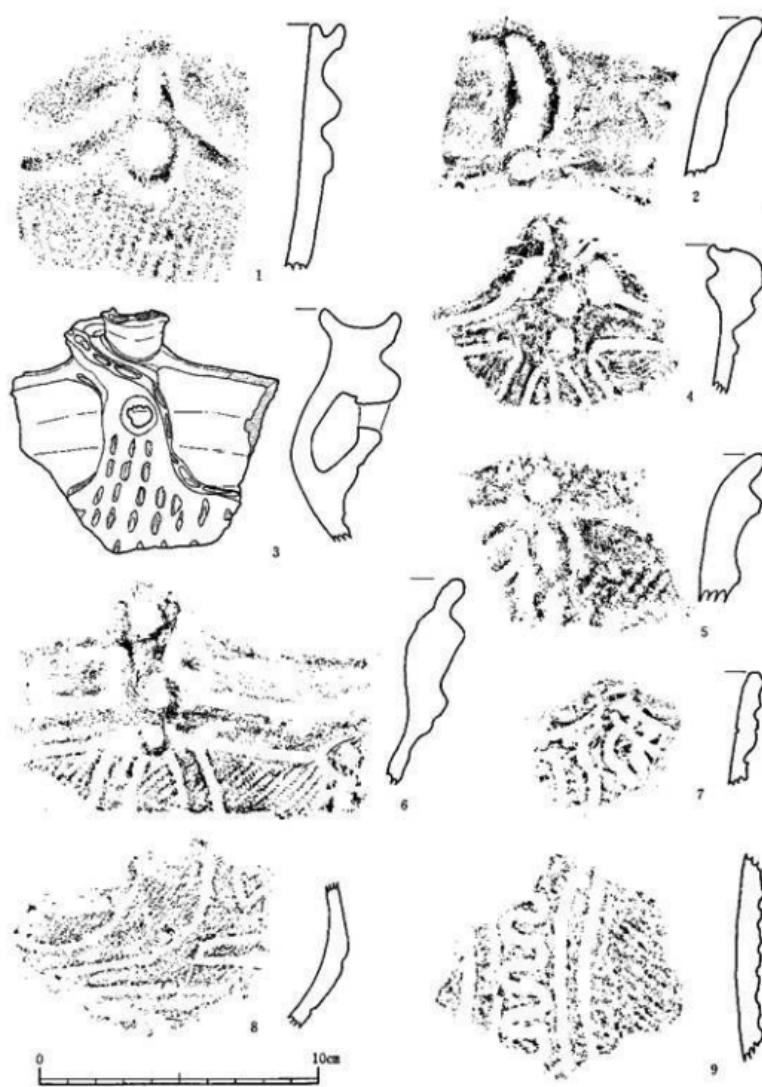
○調査区内より住居跡は検出されなかったが、この平坦面東側部分の一段下がった面に住居跡群が存在する可能性もある。

(篠原信彦)



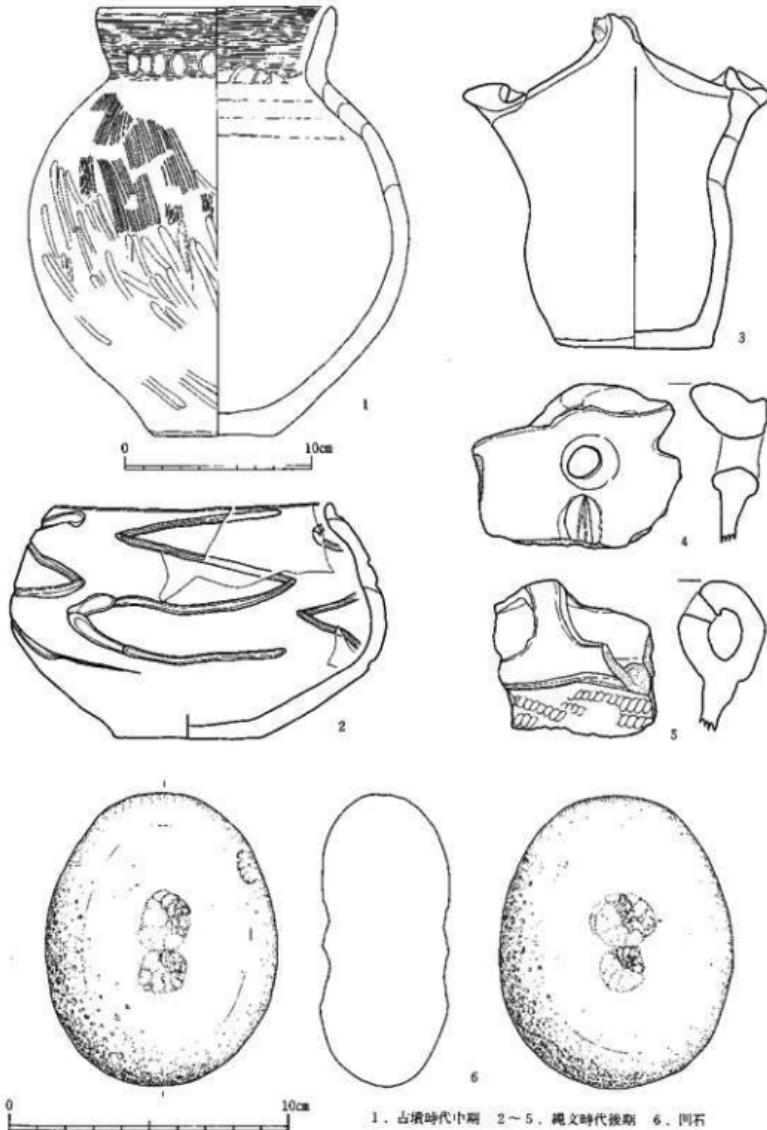
1. 縄文時代早期 2. 縄文時代前期 3～8. 縄文時代中期

第3図 遺物拓影

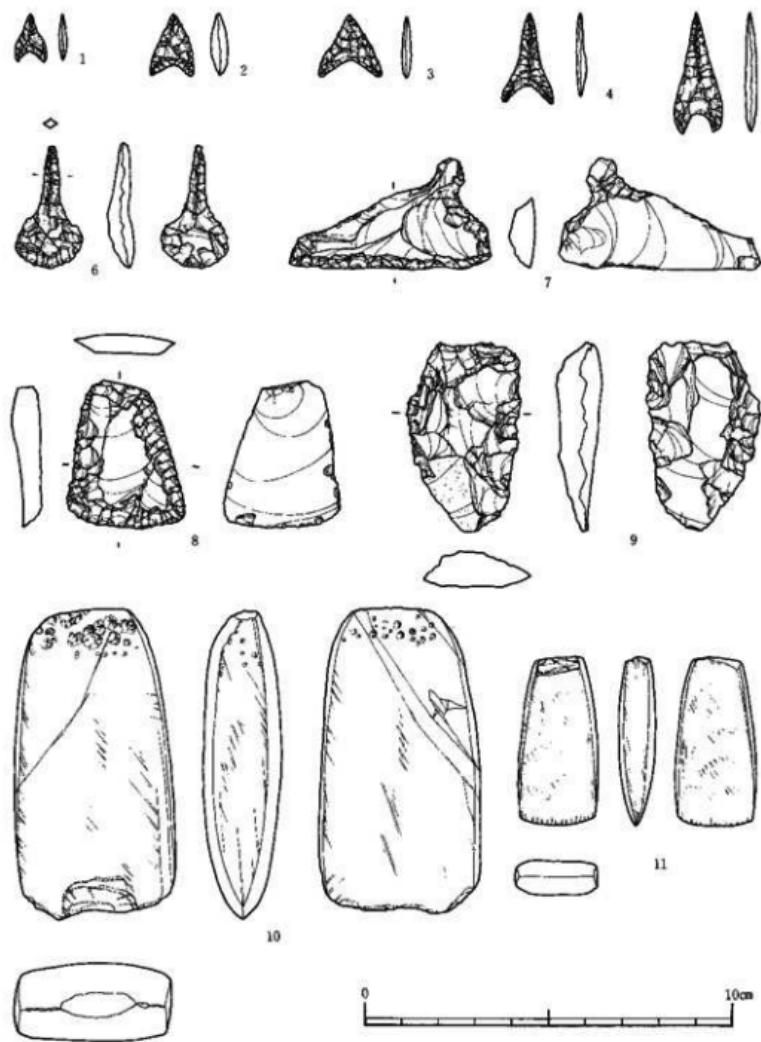


1~9. 總文時代後期

第4図 遺物拓影



第5図 遺物実測図



1~5. 石鏃 6. 石片 7. 石核 8. スクレイパー  
9. 扇状石器 10. 扁削石斧 11. 小形扁削石斧

第6図 石器実測図



1. 全 景  
(南東より)



2. 全 景  
(東より)

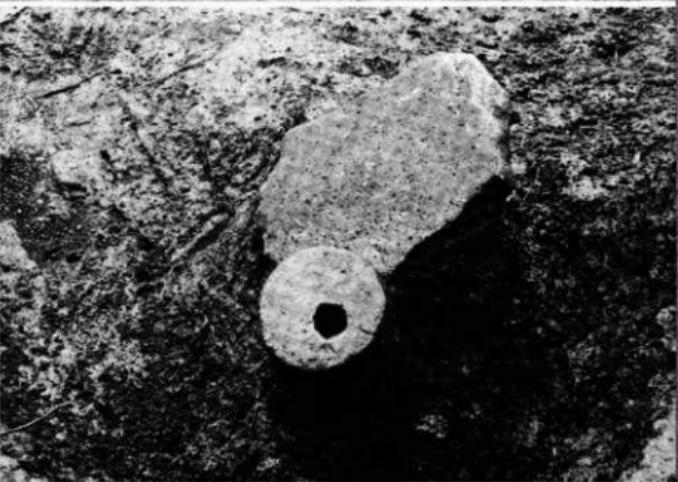


3. 1号土壤  
(北より)

4. 7号土壤  
(東より)



5. 265号ビット  
(北より)



6. 瓷片集中部  
(西より)



## 註 記

- 註1 仙台市開発局「茂庭住宅団地環境影響評価 現境編・環境影響評価編」1976  
註2 仙台市教育委員会「茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告」「仙台市開発関係遺跡  
調査報告 I」1980  
註3 札幌市教育委員会「札幌市文化財調査報告 XIV」1977  
註4 今井啓爾他「霧ヶ丘調査団」1973  
註5 仙台市教育委員会「仙台市茂庭住宅団地計画地内文化財分布調査報告」1977

## 発 挖 参 加 者

嶺岸倉治・石垣富一郎・細川 隆・太田平治・佐藤 正・住吉惣右エ門・長尾きよみ・大井ふ  
みよ・嶺岸さかえ・板山つねよ・佐藤喜恵子・根本ときわ・鈴木みつ子・嶺岸たけよ・嶺ハル  
子・太田ゆき子・桜井信子・庄子勝子・嶺岸わくり・佐藤勢子（以上本郷・生出地区）沼田  
今朝夫・佐藤わくり・佐藤いつ子・佐藤しげ子・太田恵知子・沼田とし子・玉川可奈・鈴木洋  
子（以上梨野・綱木村区）阿部正也・南雲直二・南雲祐美・横山利男・横山由紀恵・大本春  
子・清野仁子・千葉きよ子・武田藤雄・武田美津子・吉川明宏・佐々木やえ子・成川 寿・三  
浦チヅ子・松浦光子・中根ミチ子（以上折立地区）佐藤栄子・後藤タミ・早川笙子・村山タ  
マ子（以上宮城町）佐藤広史（東北大学院生）熊谷信一・木戸春夫・高橋研一・長島栄一  
石垣純子・天野エリ子・齊藤真理・蛇原千賀子・叶 文俊・佐藤栄作・真様三郎（以上東北学  
院大学生）長谷川 徹（駒沢大学生）  
(順不同)

## 職員録

### 社会教育課

課長 永野昌一  
主幹 早坂春

### 文化財管理係

係長 鈴木昭三郎  
主任 薮木高文宏  
事務官 渡辺洋一  
事務員

### 文化財調査係

係長(兼)	早坂正則	春日和一
教諭	加藤信	堀内正
主任	中城信	田代和
.	柳沼信	・
教諭	吉村信	・
主任	本原信	・
.	藤森信	・
.	佐藤信	・
.	金佐藤信	・
.	工藤信	・
.	渡辺信	・
.	主嘉吉	・
.	吉	・

## 仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物巣屋下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）  
第2集 仙台城（昭和42年3月）  
第3集 仙台市燕沢寺跡横穴古墳群調査報告書（昭和35年3月）  
第4集 史跡陸奥國分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）  
第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）  
第6集 仙台市荒巻瓦本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）  
第7集 仙台市高沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）  
第8集 仙台南向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）  
第9集 仙台市根岸町宗禪寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）  
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）  
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）  
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）  
第13集 南小泉遺跡—範囲確認調査報告書—（昭和53年3月）  
第14集 畠遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）  
第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）  
第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）  
第17集 北星遺跡（昭和54年3月）  
第18集 桥江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）  
第19集 仙台市地下鉄開係分布調査報告書（昭和55年3月）  
第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）  
第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告書Ⅰ（昭和55年3月）  
第22集 綾ヶ峯（昭和55年3月）  
第23集 年報1（昭和55年3月）  
第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）  
第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）  
第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）  
第27集 史跡陸奥國分寺跡昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）  
第28集 年報2（昭和56年3月）  
第29集 鶴山遺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）  
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）  
第31集 仙台市開発関係遺跡調査報告書Ⅱ（昭和56年3月）

---

仙台市文化財調査報告書第31集

昭和55年度

### 仙台市開発遺跡調査報告Ⅱ

昭和56年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市宮町3-7-1  
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 63-1166

---

